

自己評価的意識からみた心理的健康

長谷川 博一

序：はじめに

1 問題意識

心理学の知見に社会への還元が強く求められている昨今、人間の心理的健康 (Mental Health) の意味を明らかにしその促進をはかることは、重要で緊急の課題のひとつであると思われる。しかし、人間の心理そのものが構成概念の域を出ていないことから、心理的健康の実際的な理解ははなはだ困難な作業となる。

心理的健康を定義づける立場として、社会的適応をあげるものがある。つまり、所属する社会で積極的に自己の能力を発揮し、円滑な対人関係を営むことができることを健康の条件とするものである。しかしこの考え方をとるならば、所属する社会に応じて健康的な在り方は異なってくるであろうし、社会そのものが病理性をはらんでいる場合も考えねばならないだろう。また、個人の内面の状態との矛盾が推測される、仮性適応や過剰適応といった事態も生じてくる。これらのことから、社会的適応のみで健康を定義していくとまもなく限界に突き当たる。

別の立場に、個人の主観的な体験を重視するものがある。特に青年期を対象として、自我同一性 (Identity) の確立という観点から検討されることが多い。自我同一性が確立されると、目標の明確化や充実感の高まりといった意識が体験される。反面、自我同一性に混乱が生じると、焦燥感や倦怠感といった意識に襲われる。この自我同一性の概念を念頭におきながら、肯定的

自己概念を心理的健康の指標とする見解も多い。これらの立場に基づく研究のほとんどは、それを青年期以外の年代にも拡大して、自己評価的な意識 (肯定的自己概念) の高いのを好ましいとする前提の上にすすめられている。しかし社会的適応だけで健康が論じられないのと同様、自己評価の高いことを短絡的に健康と結びつけてよいかについては、依然十分な検討がなされていない水準であるといわざるをえない。自己評価の非常に高いものの中には、健康でない防衛的態度を示すものが含まれている (川岸、1972) のであり、それは一般的にも臨床的にも比較的容易に観察されるであろう。

それでも自己評価的な意識が健康的な心理と密接に関っていることは、多くの研究が示しているとおおり、現在では自明のこととなっている。また、カウンセリングにおいては、実態以上に低すぎる自己概念を高めることを重視する Rogers (1951) の姿勢が、基本的条件として浸透している。

自己評価的意識をより精密な健康の指標へと高めるためには、その下位構造を明確化し、またそれ以外の相互作用する特性との関連性から説明されねばならないだろう。本論文においては、自己評価的意識やそれを構成する因子と他のさまざまな指標との関連を検討し、自己評価的意識と心理的健康とのかかわりを考えていく。

2 自己評価的意識

自己評価的意識 (Self Evaluative Conscious) とは、自己に対する意識 (自己意識、自

己概念)のうちで、評価的側面のものに関する総称で、肯定的-否定的といった連続線上でのとらえ方がなされる。従来から比較的よく用いられてきた、自尊心(Self Esteem)とはほぼ同義である。自己評価的意識については、研究者によってその記述の仕方が微妙に異なっており、伝統的に一次的に強調されたり、パーソナリティや自己概念の構成因子として他の因子と並記されたり、自己評価的意識の中にさらにいくつかの下位因子を構成したりする。また自己評価を直接的に表現せず、現実自己像と理想自己像の差違(Discrepancy)によって概念化されることも多い。これらの問題は、自己評価を測定する尺度として何をを用いるかということに直接的に関ってくる。現在のところ、「それぞれの尺度で測定された特性が、自己評価的意識である」という操作的定義が主流なようにもみえる。全体的にこれら尺度総点間の相関は高いといっても、下位因子まで注目するとそれらの関係はかなり複雑となってくる。

一次的な尺度として、Rosenberg, M. (1965)のSelf-Esteem Scale(10項目)は最もよく利用されるものである。他には、Janis & Fieldの23項目、根本(1972)の27項目などの尺度があり、それぞれ自己評価の全体的高さを測定するために利用される。

パーソナリティ全般を測定するCPI(California Psychological Inventory)の中には、Sa(Self Acceptance)のような自己評価を測定する尺度も含まれている。またSD法(Semantic Diferencial Method)を用いて自己概念の構造を分析して、評価性因子として抽出される場合も多い。

梶田(1980)は自己評価的意識リスト30項目を因子分析して5つの因子、「自己受容」、「自信」、「自己防衛性」、「自己への素直さ」、「優越感」を抽出した。また、宮沢(1980)は、「自己理解」、「自己承認」、「自己価値」、「自己信頼」の4因子構造をもつ自己受容性尺度を作成したが、下位因子から判断して、自己受容を自己評価的意識の下位概念としてよいであろう。平石(1990)は自己肯定意識尺度を構成し、対自己領域として「自己受容」、「自己実現的態度」、「充

実感」の3因子、対他者領域として「自己閉鎖性・人間不信」、「自己表明・対人的積極性」、「被評価意識・対人緊張」の3因子、計6因子を見いだしている。

一方、操作的方法を用いず理論的なものとして、伊藤(1989;1990)は、自身の性格や能力に関する31項目に対し「良い-悪い」で回答する評価次元と、「好き-嫌い」で回答する感覚次元の2側面からなる自己受容尺度を構成した。高木ら(1989)は、自己認知に対する「肯定的-否定的」、「受容-拒否」の2次元の組み合わせから、自己受容の4つの下位尺度、「肯定的な自己認知に対する自己受容」、「否定的な自己認知に対する自己受容」、「肯定的な自己認知に対する自己拒否」、「否定的な自己認知に対する自己拒否」を作成した。

現実自己像と理想自己像のずれからDスコアを算出しそれを自己評価の高さと解釈する(安藤、1989)こともあるが、両者は密接にかかわっていると思われるものの、同義語として用いるのには問題があろう。なぜならば、理想とのずれを認めた上でなおそのような自己(ありのままの自己)が受容できるかどうか、自己評価的意識を考える上で鍵となるからである。

ここで、自己評価的意識の下位因子を想定する場合の配慮すべき点を指摘しておきたい。

因子が自己に対する評価的意識の範疇から逸脱しないこと、なるべく理解しやすい少数の因子で説明することである。たとえば先にあげた梶田の尺度では「自己防衛性」や「自己への素直さ」の因子、宮沢の尺度では「自己理解」の因子など、因子名から判断してそれが自己評価の意識かどうかあいまいな点が残る。山本(1989)のように梶田の尺度に基づきながらも、自己評価的意識として理解しやすい3因子(自己受容・自信・優越感)のみを利用して測定した研究もある。下位因子間の関係の複雑さとしては、梶田の尺度の一つの因子である「自己受容」が、宮沢の尺度ではさらに4つの下位因子をもつことなどがあげられる。

本研究では自己評価的意識を従来にならって広義にとらえ、「現在の自己の内面的側面についての個人的な評価的意識」とし、「客観的評価や

社会的評価」とは切り離してすすめていく。また、心理的健康との関連を探っていく上で、自己評価的意識の多次元性を前提としていきたい。自己評価的意識の測定尺度としては梶田の30項目を利用するものの、下位因子については流動的に取り扱っていくこととする。

I：文献的研究

1 目的と方法

ここでは、自己評価的意識と他の心理学的指標との関連性について検討された比較的最近の研究をレビューし、自己評価的意識の意義について考えていく。同時に、自己評価的意識測定のためとられた方法についても言及していく。

文献検索の範囲を以下の2つのものとした。

A：最近20年間に心理学研究と教育心理学研究に掲載された論文

B：最近3年間に日本心理学会と日本教育心理学会の大会においてなされた研究発表

2 結果と考察

上記範囲で検索したところ、自己評価的意識と他の指標との関連について検討のなされたものは、Aで10編、Bで19編であった。この中には、自己評価的意識との関連を検討することを主目的としていないがそのことについて述べられているいくつかの研究も含めた。自己評価的意識の測定には、Rosenberg (1965) の Self-Esteem Scale (以下SE-Scaleと略す) を用いたものが29編中8編 (約28%) と圧倒的に多かった。この尺度以外には、複数の研究で利用されたものは宮沢の自己受容性測定尺度 (3編) のみで、他のものはそれぞれ異なる既成の尺度を利用するか、オリジナルに簡易尺度を構成して用いる場合が多かった。これら29編の研究を次のような視点で整理した。

①適応的指標との関連－8編、②自己像との関連－7編、③自我同一性との関連－3編、④一般的性格特性との関連－4編、⑤親子関係との関連－2編、⑥身体的指標との関連－5編である。また、本論文の意図している他の尺度との関連からははずれるが、⑦自己評価的意識の

発達－3編についても補足的に整理した。

①適応的指標との関連

自己概念と適応の関連についての初期の研究に、森田神経症患者と正常人の比較を行なった斎藤 (1959) の研究がある。それによると神経症患者の現実自己、理想自己に対する評価は低く、また両自己像のずれが大きい。以降、椎野 (1966) など、我が国においても自己概念と適応のかかわりを明らかにしていこうとする試みは多い。

ここでは、対人恐怖的心性、孤独感、抑鬱、非行など、自己－社会的適応とかかわりが深いと考えられるものについて整理する。研究者、用いられた尺度、調査対象、結果すなわち自己評価との関連について、Table 1に示した。なお、表中尺度名につづいて開発者名の付されていないものは、その研究におけるオリジナルな測度であることを示す (以下の表についても同様)。

対人恐怖傾向 (岡田ら、1990)、孤独感 (諸井、1985)、抑鬱傾向 (工藤、1990)、挫折感 (加藤、1990) といった種々の問題がいずれも自己評価と負の相関を示している。また、子どもをもつ母親を対象に実施した青木ら (1986) の調査によると、母性意識、つまり子どもの養育において否定的感情の強い母親の自己評価は低い。これらの不適応傾向は自己評価を低下させる要因となるのか、それとも低い自己評価が不適応をもたらすのか因果関係は明らかにならないが、少なくとも自己評価の高さは適応の指標となりうる。また、自己評価的意識が適応に対して促進的に働くと思われることを示す研究がある。新名ら (1991) は、自尊心がストレスに対して緩衝的に作用し、ストレス反応を軽減させることを示した。

以上のように、自己評価的な意識は適応的方向に密接に関係することは疑いの余地はない。しかし、非行群と正常群の自己評価の高さを比較した宮野 (1981) の研究では差違が示されなかったことから、一次元的に自己評価のみで心理的健康を説明することはできないし、適応や非行の健康とのかかわりについても検討する余地を残す。同様に、甲村 (1989) らの示した療養所入院不登校児と正常児の自己意識プロフイ

ールを比較して、両群に明確な差違が認められないことは、不登校の心理学的定義や測度の問

題に帰せられるかもしれない。

Table 1 自己評価的意識と適応的指標

| 研究者 | 尺度 | 自己評価的意識 適応的指標 | 対象 | 結果 |
|--------------------|----------------------------------------------|------------------|---------------|-----------------------------------------------|
| [雑誌論文] 岡田ら 1990 | SE-Scale (Rosenberg) 対人関係尺度 (永井) | | 中学・高校 大学生 | 中学・大学生で負の相関→対人恐怖 的心性の強いものほど自己評価は 低い |
| 青木ら 1986 | SE-Scale (Rosenberg) 母性意識感尺度 | | 母親 | 母性意識において否定感得点の高 い者は低い者に対して自己評価が 低い |
| 諸井 1985 | SE-Scale (Rosenberg) UCLA孤独感尺度 (Russell) | | 高校生 | 負の相関→孤独感の小さい者ほど 自己評価は高い |
| 宮野 1981 | Q分類のためのstatement 非行 | | 入所非行少年 正常群 | 群間差なし→非行群と正常群の間 に自己評価の高さの差はみられな い |
| [学会発表] 新名ら 1991 | SE-Scale (Rosenberg) 心理的ストレス反応尺度 | | 成人 | SEは情動・意欲・思考のストレス反 応を緩衝するが、対人ストレスは緩 衝しない |
| 工藤 1990 | 現実自己像の「自己受容」因子 SDS (抑鬱尺度) | | 不明 | 現実自己において抑鬱的な者の自 己受容は低い |
| 加藤 1990 | SE-Inventry (Steffenhagen) 挫折感 (過去-現在-未来) | | 大学生 | 概して、過去から未来に至る挫折感 が小さい者の自己評価は高い |
| 甲村ら 1989 | 自己意識尺度から「自己信頼」因子 不登校 | | 入院不登校児 | 不登校群と正常群との差はみられ ない |

②自己像との関連

次に、自己像 (自己に対する認知) との関連についての整理を行なう (Table 2)。ここでは自己像を身体イメージ以外のすべての対象とし、学業、名前などの自己認知も含んだ。自己の内面的な領域に対する認知を対象とした研究では、現実自己、理想自己あるいはそれらのずれを扱ったものが多くなっている。

現実自己と理想自己のずれについてみると、ずれが小さいほど自己評価は高く、大きいと自己評価は低いといった一貫した結果がえられている (岡田、1987; 遠藤、1991)。特にその関係は、公的自意識が高い群において顕著である (伊藤、1991a)。また、理想自己、可能自己そのものとの関係を調べた研究では、理想のレベルが高いと自己評価も高くなっている (遠藤、1989)。これらを要約すると、理想自己像が高く、現実自己像とのずれが小さいと認知される

場合に自己評価は高いといえる。

Rogers (1951) は、カウンセリングにおいて、治療前期の患者の現実自己と理想自己の間には関連はなく、治療後期には両者の間に相関のあることを示し、それは理想自己の変容であるよりも、現実の自己概念の変容であると説明した。しかし現実と理想のずれの小さいことがそのまま好ましい状態であると結論づけてよいのであろうか。ずれがゼロという事態は健康的なのであろうか。この問題に関して加藤 (1960) の言葉を引用すれば、「ずれと適応の関係は直線的なものでなく、むしろ曲線的なものとして把握されるべきである」と考えられる。

次に、宮本 (1991) の研究では、他者からの「人気人望」についての認知との間に自己評価との正の相関がみられるが、この「人気人望」はまさに公的自意識 (菅原、1984) の現れであるとみなすことができ、伊藤の結果と考えあわ

せると、公的自意識の高い者で他者からの現実自己に対する評価が高いと認知している場合、自己評価は極めて高くなるということができよう。

自己評価と性役割受容との関係において、女子にとっては「女性典型性」因子の受容と自己受容が負に相関するという井上ら(1991)の結果は、一見矛盾するようにみえる。しかしこれ

は、「女性典型性」がいわゆる日本的伝統的性役割観にそった「ひかえめ」な女性像に代表される因子であり、パーソナリティとしての消極性と低い自己受容が結びついているためである。また、名前における自己イメージと自己受容の関連性が高い(宮沢、1990)ことは、名前自体が評価の対象である自己の一領域となっているためであろう。

Table 2 自己評価的意識と自己像

| 研究者 | 尺度 | 自己評価的意識 自己像 | 対象 | 結果 |
|--------------------|----------------------------------------------------------|----------------|----------------|------------------------------------------------|
| [雑誌論文] 岡田 1987 | SE-Scale (Rosenberg) 現実-理想自己像間のズレ CPIよりWb (幸福感) 尺度 | | 中学・高校 大学生男子 | ずれ得点と負の相関→ズレが小さいほど自己評価は高い。幸福感と正の相関→幸福感高いと評価も高い |
| [学会発表] 井上ら 1991 | 役割受容尺度 (三川) 4 因子 性役割尺度 (井上ら) 4 因子 | | 大学生 | 性役割の「男性典型性」「女性統合性」と正の、「女性典型性」と負の相関 |
| 遠藤 1991 | SE-Scale (Rosenberg) 正-負の理想自己との差違 | | 大学生 | SEは正の理想自己との差とは負に、負の理想自己との差は正に相関する |
| 宮本 1991 | Self-Esteem尺度 (加藤ら) 学業に関する能力認知 | | 中学生 | 「自己肯定」は「人気人望」と正に相関し、SEは他者評価の認知を反映する |
| 伊藤 1991 a | 自己受容 (評価-感覚次元) 自意識尺度 (菅原)、理想とのずれ | | 中学生・大学生 | 公的自意識が高い群では、自己受容とずれ得点に負の相関がある |
| 遠藤 1990 | SE-Scale (Fleming et al.) 現実・理想・可能自己 | | 中学生 | 理想・可能自己と正の相関→理想・可能自己が高いと自己評価は高い |
| 宮沢 1990 | 自己受容性尺度 (宮沢) 名前についての意識 | | 大学生 | 自己の名前が好きで、量感を感じる者の自己受容性は高い |

③自我同一性との関連

自我同一性はErikson、E. H. (1959) により、青年期に達成されるべき課題として概念づけられた。しかしそれを実証的に研究することはなかなか困難であるので、従来の研究の多くは、それが達成された時に付随して生起すると考えられる特徴を測度として、自我同一性達成の程度を決定しようとした(無藤、1979)。それらの特徴とはすなわち、自己概念の安定性、全体的な適応や健康などである。このことから、自我同一性として測定されたものはその中にすでに自己概念の肯定性が織り込まれているのであるから、自己評価的意識との相関が高いことは当

然予測される。

このことを自明の理としてか、両概念の関連を調べた研究は多くはなかった (Table 3)。辻井 (1991) は、コンピテンス (有能感) が自我同一性形成の基盤として重要なことを示した。宮下 (1987) の研究では、自我同一性達成と自己評価の間に正の相関は示されたがその程度は弱く、また園田ら (1990) の同一性地位 (Marcia) との関連を調査した研究において、地位群別で有意差が認められなかったことは、両概念の理論的基礎の共通性を考えるならば疑問が残るところである。

Table 3 自己評価的意識と自我同一性

| 研究者 | 尺度 | 自己評価的意識 自我同一性 | 対象 | 結果 |
|-------------------|-------------------------------------------|------------------|-------------|-----------------------------------|
| [雑誌論文] 宮下 1987 | Self-Esteem尺度 (根本) 自我同一性尺度 (Rusmussen) | | 大学生 | 弱い正の相関→同一性達成傾向にある者の自己評価の高さがうかがえる |
| [学会発表] 辻井 1991 | コンピテンス尺度 (桜井) 4 因子 同一性次元尺度 (加藤) | | 小・中学 高校生 | 「一般的自己価値」因子と正の相関→自己評価が同一性形成の基盤となる |
| 園田ら 1990 | 自己評価尺度 同一性地位面接 (Marcia) | | 成人女子 | 同一性地位によって自己評価得点の間に有意差はみられない |

④一般的性格特性との関連

性格特性との関連についてTable 4に整理した。Y-G性格検査を用いて性格全般について比較したものと、ひとつの特性のみを取り上げたものがあった。

Y-G性格検査との関連では、12因子のいずれについても適応的な者の自己評価が概して高い傾向にある(川岸、1972;伊藤、1991)といえる。他の研究においても、外向的、積極的な者の自己評価は高い(岩淵ら、1972)結果を得ている。高い自己評価が対人関係において積極性を促進させる方向に作用すると考えられる。

尾見(1991)が示したとおり、「お人好し」のような、対人関係の摩擦を軽減し円滑さをもたらすと考えられる特性も、「消極的なお人好し」の場合は内向性・消極性という性格特性との関連で、低い自己評価と結びついているようである。相川(1991)は、シャイネスを社会的不安の一形態と位置づけ、特性シャイネス尺度の構成概念妥当性検討を通じて自尊心との負の相関関係を示した。「消極的なお人好し」やシャイネスなどは、対人的側面での不安への防衛的態度という点で共通の心性を有するものと思われる。

ところで、川岸(1972)の研究では他者受容と適応の間には関連は見いだされなかったが、過去の多くの研究結果は自己受容と他者受容の積極的な相関を示してきた。加藤(1960)は適応との関連からそれらの知見を整理して、「自己受容の高い者は他者受容も高く、かつ他人からも受容されていると感ずる傾向が強いが、他人

による実際の受容とは無関係である」と述べた。つまり、自己受容と他者受容は正に相関するが、良好な人間関係(対人的適応)とは関連がないのかもしれない。自己受容、他者受容、他者からの受容の関係について、いまだ検討される余地を残しているといえる。

発達的に比較した伊藤(1991b)の研究では、中学生において両者の関連性が最も小さかったが、それは中学生においては自己評価の意識がいまだ未分化で明確な意識としてとらえられないためであるかもしれない。

Table 4 自己評価的意識と一般的性格特性

| 研究者 | 尺度 | 自己評価的意識 一般的性格特性 | 対象 | 結果 |
|--------------------|--------------------------------------------|--------------------|--------------|-------------------------------------------------|
| [雑誌論文] 相川 1991 | 自尊心尺度 (遠藤ら) 3 因子 特性シャイネス尺度 | | 大学生 | シャイネスと負の相関—特に自尊心の対人的側面との相関が強い |
| 岩淵ら 1982 | SE-Scale (Rosenberg) | | 大学生 | 正の相関→外向的な者ほど自己評価は高い |
| 川岸 1972 | セルフモニタリング尺度の外向性 自己受容—他者受容尺度 Y-G 性格検査 | | 大学生 | 自己受容の高いものは適応的 他者受容は適応と関連がない |
| [学会発表] 伊藤 1991b | 自己受容 (評価-感覚次元) Y-G 性格検査 | | 中学・高校 大学生 | 正の相関→自己受容高いと適応的、 相関は高校生で最も強く続いて大 学生、中学生の順 |
| 尾見 1991 | 自己評価に関する項目 お人好しに関する項目 | | 大学生 | 積極的—消極のお人好しのうち、消 極のお人好しは自己評価と負に相 関 |

⑤親子関係との関連

Rosenberg (1965) も指摘したとおり、自己評価に影響を与える要因として親子関係は重要であり、特に子供にとってモデルとなる同性の親の役割が大きいことが知られている。

徳田 (1987) の研究においてもそれは示され、同性の親によって自立すべき存在として扱われることが子供の自己評価を高める効果をもつ。

森下 (1990) の研究でも同様な結果が得られ、自己評価の高さと親の態度については一貫した結果が示されているといえる。

子どもの自己像に母親の自己像が相対的に大きく作用するという報告 (古澤ら、1990) があるが、親の自己評価の水準が子供の自己評価の水準とどう関わっているかについては、最近の研究ではあまり取り上げられていない。

Table 5 自己評価的意識と親子関係

| 研究者 | 尺度 | 自己評価的意識 親子関係 | 対象 | 結果 |
|-------------------|---------------------------------------------|-----------------|-------------|-------------------------------------|
| [雑誌論文] 徳田 1987 | SE-Scale (Janis & Field) 親子関係診断尺度 (EICA) | | 高校生 | 同性の親に心理的に自立すべき存在として扱われると自己評価は高まる |
| [学会発表] 森下 1990 | 自己受容性尺度 (宮沢) EICAから情緒的支持、統制 | | 小・中学 大学生 | 概して、両親の情緒的支持が強く、 統制が弱いと、自己受容性は高い |

⑥身体的指標との関連

次に身体的指標との関連を概観する (Table 6)。身体的指標として、自己の身体イメージ、疾患、姿勢等を含んだ。まず自己の身体イメージに関しては、身体についての満足度や姿勢についての満足度と自己評価の間に正の相関 (石井ら、1991; 柴田ら、1990; 藤岡、1989) があり、身体が性格などの内面的特性と関連しあっ

て、自己概念の一領域を構成していることがうかがえる。また、身体関心集中度との関連を調べた (藤岡、1989) 結果、関心が強いと自己受容性は低くなった。このことは、身体への関心集中度が自己意識 (菅原、1984) の強さに通ずるもので、公的自意識と自己受容性の負の相関関係を示した伊藤 (1991a) の結果と一致する。身体意識と自己意識の関連で、両意識とも公的側

面での相関が最も高いことが示されている（河合ら、1990）が、ここでの身体関心は、他者の目を通した公的なものが反映されているものと思われる。

疾患とのかかわりについては、喘息（小笠原、1989）と神経性食欲不振：Anorexia Nervosa（葉賀ら、1990）の2つが取り上げられていた。これらの疾患は身体的症状をとるものの、その

背景に心理的要因を重視すべきものである。いずれも疾患群は非疾患群に比べて自己評価は低い。特に神経性食欲不振の患者は、〈悪い自分〉が〈本来の自己〉に代わって調節機能を果たす（遠山、1989）と指摘されるように、身体をも含めた自己像の悪化自体が疾患の本質であると考えられている。

Table 6 自己評価的意識と身体的特徴

| 研究者 | 尺度 | 自己評価的意識 身体的指標 | 対象 | 結果 |
|----------|---------------------------------------------------|------------------|--------------|----------------------------------|
| [学会発表] | | | | |
| 石井ら 1991 | 自尊感情尺度（遠藤） 姿勢の主観的な評価 | | 大学生 | 正の相関→自分の姿勢が良いと認知している者の自尊感情は高い |
| 小笠原 1989 | 自己意識尺度から自己信頼 気管支喘息 | | 通院喘息児 正常児 | 喘息群で自己信頼感が低い |
| 柴田ら 1990 | SE-Scale（Rosenberg） 身体満足度尺度（21部位） | | 大学生 | ほぼすべての部位で正の相関→身体満足度が高い者は自己評価が高い |
| 藤岡 1989 | 自己受容性尺度（宮沢） 身体関心集中度、身体満足度 | | 高校生 | 自己受容性は身体関心集中度と負に相関し、身体満足度と正に相関する |
| 葉賀ら 1990 | TSCSよりPositive、Satis.の因子 Eating Attitudes Test | | 大学生女子 | 神経性食欲不振傾向群は非傾向群に比して自己肯定性、受容性は低い |

⑦自己評価的意識の発達

最後に、自己評価的意識の発達の变化について補足的に整理しておく（Table 7）。4編の研究で用いられた尺度はそれぞれ異なり、調査対象も生涯に渡るもの（林ら、1991）、青年期全般のもの（平石、1991；伊藤、1990b）、中学生期のもの（宮沢、1988）と異なっている。宮沢の中学生期を対象とした研究のみが、縦断的方法がとられている。

青年期を対象とした3つの研究を総合すると、青年期内においては自己評価的な意識は徐々に低下していくといえよう。宮沢の研究では「自己承認」の因子に低下がみられ、自己受容テストを用いた伊藤の研究で男子に大きな低下がみられたことから、特に受容的側面の低下が示されているとも考えられる。林らの研究をあわせると、青年後期から自己評価的意識は高まり、中年期にかけてピークに達し、それ以降は再び低下していくといえる。、青年中期に一時的な自

己評価の低下を示す時期がある点は、従来の知見と概ね一致しているといえよう。

Table 7 自己評価的意識の発達研究

| 研究者 | 尺度 | 自己評価的意識 | 対象 | 結果 |
|-------------------|----------------------|---------|--------|-------------------------------------|
| [雑誌論文] 宮沢 1988 | 自己受容性測定尺度 (宮沢) | 縦断的 | 中学1～3年 | 全体的に大きな変化はないが、「自己承認」では低下していく |
| [学会発表] 平石 1991 | 自己肯定意識尺度 (平石) | 横断的 | 中学～大学生 | 中学生が高校生よりも自己肯定的な傾向にある |
| 林ら 1991 | SE-Scale (Rosenberg) | 横断的 | 8才～92才 | 自己評価は中年期で最も高く、青年前期で最も低い。男子の方が高い |
| 伊藤 1990b | 認知-感情的自己受容テスト | 横断的 | 中学～大学生 | 男子は中学～大学にかけて両側面の受容が一貫して低下し、女子は変化しない |

以上、自己評価的意識について7つの視点からの整理を行なった。自己評価的意識そのものの研究は少なく、他の概念を検討する際の構成概念妥当性、併存的妥当性をみる上で尺度を利用しているものが多い。それらに共通して、自己評価的意識が適応や健康など好ましさの指標という前提となっている。また、自己評価が下位因子に分析されてはいても、対人的側面と自己側面の比較にとどまり、十分な検討はなされていないようである。

自己評価は一次元的に高いほうが好ましいのか、もし下位因子を設定したほうがよいのなら、それぞれの因子は心理的健康にどうかかわっているのか、検討の余地を残した状態である。

II：筆者の実施した調査

1 目的と方法

自己評価を心理的健康の観点から考察するための材料を補うために、これまでに十分検討のなされていない他の尺度との関連を明らかにしていくことが必要である。自己評価を測定するものとして、一連の調査(調査AからF)にすべて共通して、梶田(1988)の自己評価的意識尺度30項目を使用した。梶田が女子のデータに基づいて実施した分析では、自己評価的意識は前述のとおり、5つの因子構造をもつとされた。今回の調査においても因子分析を実施し、梶田の因子が抽出されるかどうかを確認し、自己評

価について因子別の考察に重点をおく。それは、自己評価すべては一次元的に適応の指標となるのではなく、多面的で、それぞれの自己評価側面の健康とのかかわりは複雑であろうという仮説をいっているからである。

筆者が自己評価的意識尺度との関連を検討するためにあわせて実施した、一連の調査における尺度等はTable 8の通りである。なお、調査AとB、調査EとFはそれぞれ同時に実施され、AとBの結果はすでに長谷川(1990)で報告されている。

Table 8 本研究において自己評価的意識との関連を検討した尺度

| 調査 | 調べられた尺度等 |
|----|----------------------------------|
| A | MPIのE(外向性)、N(神経症傾向)尺度 |
| B | 青年期問題行動傾向の5因子(長谷川、1989) |
| C | MMPIのPa(偏執性)、Sc(精神分裂性)、Ma(軽躁性)尺度 |
| D | 学業適応 |
| E | 同一性混乱尺度(砂田、1979) |
| F | 入学受容度 |

(1) 調査A

ここではまず、Y-G検査以外の測度で適応を測定し自己評価との関連をみるために、MPI(モーズレイ性格検査)より、E(外向性)尺度24項目とN(神経症傾向)尺度24項目の計48項目を用いた。過去の研究では、一貫して、適応と自己評価の間に正の相関が示されている。

(2) 調査B

青年期問題行動傾向の測定には、長谷川(1989)で明らかになった問題行動傾向測定尺度(女子用)の5因子、①奔放、②対抗、③意識、④無為、⑤身体から、各因子5項目ずつ、計25項目を構成して(Table 9)用いた。問題行動に対する従来のとらえは、登校拒否や暴力、非行といった、問題の本質からはかけ離れ、ある現象に注目して呼称するにすぎなかった。その意味では正しく分類されていなかったといえる。この尺度は従来の呼称から独立して、客観的、包括的に問題行動を理解することを可能としている。また、この尺度は大学生を対象に高校時代のことを評定させるものであり、そのような教示を行ない実施した。

調査AとBの実施は、集団場面で、自己評価的意識尺度、MPI、問題行動傾向尺度の順で実施した。調査対象は、大学1、2年生女子163名であった。

(3) 調査C

長谷川(1991a)は、Rogers、Cの理論を基礎に、実際の体験よりも自己評価が高すぎる場合の不健康さを述べた。ここでは病理に起因する自己評価の高さについて検討するための資料を提出する。

MMPI(ミネソタ多面的人格検査)の臨床尺度から、Pa(偏執性)、Sc(精神分裂性)、Ma(軽躁性)尺度を用いる。これらの3つの病理は、いずれも自己評価の高い方向への関連が予測されるからである。また、MMPIは健常者に実施して、各尺度に特徴的な傾向の測定を可能としている。オリジナル版では、Pa尺度40項目、Sc尺度78項目、Ma尺度46項目と項目数が多いため、この調査ではそれぞれ20項目ずつをランダムに抜粋し(Table 10)、計60項目とした。

この調査は、集団場面で、自己評価的意識尺度、MMPIの順に実施した。調査対象は大学3年生女子65名である。

(4) 調査D

ここでは、学校内対人関係を中心とした社会的適応ではなく、学業上の適応に限定して調べることとした。過去に、成績に対する自己イメージと自己評価との関連を調査したもの(宮本、

1991)はあったが、ここでは客観的な学業成績との関連を確かめる。ただし、学業成績の良いのを適応的、あるいは健康的と考える前提はもっていなかった。

学業適応得点への換算を以下のような方法で行なった。大学入学後3年間で単位を取得したすべての科目の成績に対し、 $A=3$ 、 $B=2$ 、 $C=1$ と配点し、それらを合計した。受講したものの、単位取得がなされなかった科目に対しては加点されず、そのような科目が多くなれば合計点は低くなるので、学業上の不適応状況が反映される。

集団的に質問紙調査を実施したのは自己評価的意識のみで、学業については調査者によって独立に調べられた。対象は、すでに3年間の成績が明らかになっていた大学4年生の女子62名である。

(5) 調査E

自我同一性の理論的背景を考えると自己評価的意識とのかかわりは密接であると予想されるが、これらの関連を研究したものは多くなく、その結果もそれほど強い相関関係を示してはいなかった。そこで、砂田(1979)の同一性混乱尺度から「同一性混乱」因子4項目(Table 11)を用いて、同一性達成-混乱と自己評価の関係について再検討する。

(6) 調査F

自己評価の一般的発達傾向については前章で触れたが、その発達に及ぼす経験の効果についても検討することが必要である。ここでは高校卒業後の進学を経験を取り上げる。進学の事態において、それが受容的経験(望んだ学校への進学)であるか非受容的なもの(望まない学校への進学)であるかに分けることができる。前者においては、それは自尊心を高める方向の経験に、後者は低下させる経験になるであろう。この進学受容度を測定するために、3項目の尺度を構成した(Table 12)。

調査EとFの尺度の実施は、自己評価的意識尺度、同一性混乱尺度、進学受容尺度の順に、集団法で行なった。調査対象は、看護専門学校1年生女子121名であった。

Table 9 問題行動傾向尺度の項目と因子負荷

| 因子 | 項目内容 | |
|----|-------------------|------|
| 奔放 | 1 時々外泊した | .600 |
| | 2 頭髪や制服は守らなかった | .573 |
| | 3 遊戯場によく出かけた | .493 |
| | 4 夜遅くまで起きていた | .469 |
| | 5 アルバイトをしていた | .443 |
| 対抗 | 6 嫌いな授業に出なかった | .684 |
| | 7 時々学校の物を壊した | .635 |
| | 8 人と喧嘩をして怪我をした | .572 |
| | 9 先生に叱られてばかりいた | .500 |
| | 10 学校で時々人をいじめた | .439 |
| 意識 | 11 死んでしまいたいと思った | .591 |
| | 12 誰にも言えない悩みがあった | .483 |
| | 13 両親が大嫌いだった | .447 |
| | 14 学校をかわりたいと思った | .428 |
| | 15 学校に仲の悪い友人がいた | .380 |
| 無為 | 16 家でほとんど勉強しなかった | .563 |
| | 17 ほとんど外出しなかった | .437 |
| | 18 趣味は全くなかった | .432 |
| | 19 テレビばかり見ていた | .405 |
| | 20 人に自慢できるものがなかった | .381 |
| 身体 | 21 学校をよく欠席した | .672 |
| | 22 登校前に体調が悪くなった | .605 |
| | 23 病気がちであった | .555 |
| | 24 男友達とよくデートをした | .434 |
| | 25 時々化粧をした | .334 |

調査A、Bでえた163名のデータを用い、自己評価的意識の因子構造が梶田の5因子と合致するかどうかの検討を行なったところ、5因子による分析では因子に含まれる項目の不一致が多いことがわかった。したがって、再度、主因子法—バリマックス回転による因子分析を行ない、4因子を抽出して、それぞれに、①自己受容、②開放性、③対人過敏、④優越感と命名した。因子分析結果はTable13に示されている。

「自己受容」は、ありのままの自己を受け入れられること、「開放性」は、他者との素直なかわりがもてること、「対人過敏」は、他者の目に映る自己のあり様が気になること、「優越感」は、他者に比較して自己が優れていることを意味し、いずれもそのような自己評価的な意識を反映していると思われる。ここで抽出した4因子を、調査Fまでのすべての自己評価的意識尺度の因子として共通に採用することにした。

Table10 MMPIオリジナル版より抜粋した項目番号

| 尺度 | 項目番号(カッコ内は頁) |
|----|-------------------------------------------------------------------------------|
| Pa | (1)16、24(4)3、19、20、21(5)1、4(6)7、8、(10)5、14、23、29(11)5、16、19(12)8、18(13)5 |
| Sc | (1)12、15(2)3、22(4)7(5)1(6)6、18(7)2、16、(8)2(9)1(10)6、27(11)9、12、24(12)15、22、26 |
| Ma | (1)13、21(3)4、13(4)10、11、29(5)14、28(6)16、(7)1(8)12、16、18、28、30(9)23、26、28(10)9 |

Table11 同一性混乱尺度(砂田、1979)の項目

| | |
|---|-----------------------|
| 1 | 今の自分は本当の自分でないような気がする |
| 2 | 私には相反する2つの性格があるように思える |
| 3 | 気がかわりやすい |
| 4 | 自分がなにものであるかわからない |

Table12 進学受容尺度の項目

| | |
|---|-------------------------|
| 1 | 私はこの学校に入学したことに満足している |
| 2 | 私はこの学校に入ることをめざして準備してきた |
| 3 | 私はこの学校の入学試験に合格してうれしい思った |

2 結果

(1) 自己評価的意識尺度

Table13 自己評価的意識尺度因子分析結果

| 因子名 | 項目 | I | II | III | IV | 共通性 |
|-----------------|------------------|------|------|------|------|-------|
| I 自己受容 | 18 自分がいやになるときがある | -.66 | .24 | .11 | -.17 | .53 |
| | 10 現在の自分に満足している | .61 | .04 | .27 | .07 | .46 |
| | 15 自分に自信をもっている | .59 | -.16 | .19 | .35 | .53 |
| | 16 人間は結局ひとりである | -.58 | -.15 | -.00 | .24 | .41 |
| | 28 今のままの自分ではいけない | -.56 | -.15 | .03 | -.08 | .36 |
| | 9 人より劣っていると感じる | -.53 | .17 | -.05 | .20 | .43 |
| | 26 別の人に生まれ変わりたい | -.46 | -.03 | -.10 | -.12 | .24 |
| | 30 くやむことがよくある | -.43 | .45 | -.03 | -.04 | .39 |
| 21 他の人をうらやましく思う | -.42 | .35 | -.04 | -.10 | .32 | |
| II 開放性 | 5 人からうらやましがられる | .06 | .65 | -.08 | .20 | .48 |
| | 11 私をわかってくれる友がいる | .09 | .59 | .33 | .13 | .48 |
| | 20 愛する人のため犠牲になれる | -.08 | .59 | -.15 | .25 | .45 |
| | 13 人を信じることができる | .03 | .57 | .01 | -.24 | .38 |
| | 1 人とうまくつき合える | .33 | .52 | .18 | .18 | .44 |
| III 対人過敏 | 27 自分が傷つくのを恐れる | -.01 | -.18 | .61 | -.33 | .52 |
| | 8 うわさが気になる | -.21 | -.01 | .58 | -.00 | .38 |
| | 12 少しでも良く見られたい | -.03 | .02 | .51 | .11 | .28 |
| | 17 ばかにされたくない | .10 | -.33 | .51 | .34 | .50 |
| | 29 他の人の反対が心配になる | -.37 | .04 | .51 | .01 | .41 |
| | 23 小さなことをくよくよ考える | -.32 | .04 | .50 | -.24 | .42 |
| | 6 人から好かれていたい | .23 | .21 | .49 | -.05 | .34 |
| | 30 くやむことがよくある | -.43 | -.03 | .45 | -.04 | .39 |
| 3 どんな不幸にもくじけない | .22 | .12 | -.41 | .36 | .36 | |
| IV 優越感 | 19 他の人に比べてすぐれている | .25 | -.00 | .05 | .63 | .46 |
| | 22 尊敬される人間になるだろう | .12 | .26 | -.12 | .63 | .50 |
| | 7 自分を頼りないと思う | -.39 | -.06 | .24 | -.54 | .51 |
| | 25 人に見られていると感じる | -.27 | .13 | .18 | .41 | .29 |
| 固有値 | | 3.96 | 2.49 | 3.11 | 2.32 | 11.88 |

項目30は第I因子と第III因子に共通

各調査の自己評価的意識尺度結果を群別に Table14に示した。

青年期において自己に向けられる意識は増大し、青年後期にかけては自己評価の上昇傾向が指摘されていた。今回実施した調査結果から大学生期における自己評価の上昇がみられるかどうかを確かめるために、大学生女子（調査AからD）の自己評価的意識尺度の因子別得点を、学年別に Table15に示した。分散分析の結果、すべての因子において有意差が（ $P < .05$ ）みられたので、続いてテューキー法による多重比較を実施し、Table16のような学年差の結果を得た。自己受容の因子では1年生が他のすべての学年より低く、開放性では逆に他の学年より高くなっている。対人過敏と優越感の因子は、低学年の得点の方が高い傾向にある。学年が進むにつれて自己受容得点は上昇し、残りの3つの因子

の得点は減少していく。

対人過敏の因子のみが否定的方向性をもっているため、自己受容と対人過敏の因子では肯定的方向へ、開放性と優越感の因子では否定的方向への発達的变化であるといえる。従来の研究では青年後期の自己評価の上昇が指摘されてきたが、今回の結果はこれを支持するようにはみえない。しかしTable7にあげた発達的研究で用いられた自己評価の測定尺度は、いずれも対人的側面を含んでいるものではなく、その点では今回用いた自己受容の因子との関連が深いと思われる。したがって、青年後期において、自己評価の中の対自己領域は発達的に高まり、対人的領域は低下すると解釈するのがよいであろう。

しかし今回のデータは横断的であるので、厳密には発達的变化を示しているとはいえないか

もしれない。また、縦断的データであっても、長谷川 (1991b) が実験的に得たように自己評価を測定する際に現れる再検査効果は大きいことから、厳密なデータ収集計画が要求される。

次に、学年を統制して女子大学生と看護専門学校生の比較をしたところ、3つの因子で有意差がみとめられた。すなわち、自己受容は看護学校生で高く (P<.05)、対人過敏と優越感で大

学生の方が高かった (P<.01)。対自己領域の評価は看護学校生で高く、対人的領域の評価は大学生で高いといえる。発達的には看護学校生の方が上の段階にあると考えられ、このことは看護学校生が入学の時点で、職業専門性意識や将来の目標など明確に自覚しているためかもしれない。

Table14 自己評価的意識尺度の群別平均得点 (SD)

| 因子 | 群 (N) | A・B・C (163) | C (65) | D (62) | E・F (121) |
|----------|-------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| I 自己受容 | | 13.56(3.81) | 14.01(3.99) | 13.92(3.91) | 13.97(3.71) |
| II 開放性 | | 11.04(2.22) | 10.52(2.44) | 10.18(2.41) | 11.18(1.81) |
| III 対人過敏 | | 22.41(3.50) | 21.06(3.54) | 20.68(3.06) | 21.38(3.25) |
| IV 優越感 | | 6.15(1.67) | 5.63(1.63) | 5.39(1.60) | 5.09(1.50) |

Table15 自己評価的意識尺度の学年別平均得点 (SD)

| 因子 | 学年 (N) | 1 (76) | 2 (87) | 3 (65) | 4 (62) |
|----------|--------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| I 自己受容 | | 12.68(3.20) | 14.33(4.07) | 14.01(3.99) | 13.92(3.91) |
| II 開放性 | | 11.55(2.18) | 10.60(2.43) | 10.52(2.44) | 10.18(2.41) |
| III 対人過敏 | | 22.89(3.26) | 21.99(3.70) | 21.06(3.54) | 20.68(3.06) |
| IV 優越感 | | 6.12(1.60) | 6.17(1.73) | 5.63(1.63) | 5.39(1.60) |

Table16 自己評価的意識尺度得点の学年差

| | | | |
|----------|----------|----------|----------|
| I 自己受容 | 1 < 2 ** | 1 < 3 * | 1 < 4 * |
| II 開放性 | 1 > 2 * | 1 > 3 ** | 1 > 4 ** |
| III 対人過敏 | 1 > 3 ** | 1 > 4 ** | 2 > 4 * |
| IV 優越感 | 1 > 4 ** | 2 > 4 ** | |

* : P<.05 ** : P<.01

(2) MPIのE、N尺度

MPIと自己評価的意識尺度の関連をTable17に示した。1%水準で有意な相関で、相関係数 (r) が.3以上の場合を意味のある相関と考えることとした (以下同様)。E (外向性) 尺度は自己受容、開放性の因子と正に相関し、N (神経症傾向) 尺度は自己受容と負、対人過敏と正に相関している。外向性は自己評価の高さ、神経症傾向は自己評価の低さと関係している。自己受容は両尺度と有意に関連しているため、自己受容している者は外向的で情緒的に安定しているといえる。これに対し、優越感は何の関連もみられなかった。

Table17 MPIと自己評価的意識尺度の相関

| | 自己受容 | 開放性 | 対人過敏 | 優越感 |
|--------|-------|------|------|------|
| MPI-E | .33* | .46* | -.16 | .17 |
| MMPI-N | -.54* | -.18 | .39* | -.04 |

* : P<.01でr>.3

(3) 問題行動傾向尺度

問題行動傾向尺度と自己評価的意識尺度の関連をTable18に示した。意味のある相関がみられものは「意識」と「無為」の因子であった。両因子とも自己評価の低い方向に関連しているが、「意識」は対自己領域の評価に、「無為」は対人的領域の評価につながっている。この2つの問題行動因子は行動化がとられないという点で、他の因子と区別され、問題が自己の内へ向かう (内向化) 場合に自己評価の低下を伴うと結論できる。

外向化問題行動因子の中では、今回の基準で意味のある相関のみられたものはなかったが、「奔放」の因子のみが自己評価の高い方向への

関連をうかがわせている。対人的領域の評価のうち、開放性と正の、対人過敏と負の相関係数（いずれも $P < .05$ ）がえられている。したがって、「奔放」の問題は社会的には問題と認知されつつも、対人関係上の適応についての自己認知からみれば、むしろ好ましい事態ではないかとの指摘がなされよう。

「対抗」と「身体」の因子は自己評価的意識のいずれの側面とも関連を示していない。

Table18 問題行動傾向と自己評価的意識尺度の相関

| | 自己受容 | 開放性 | 対人過敏 | 優越感 |
|----|-------|-------|------|------|
| 奔放 | .11 | .23 | -.21 | -.04 |
| 対抗 | -.16 | .08 | -.17 | -.05 |
| 意識 | -.32* | -.05 | .07 | .01 |
| 無為 | -.27 | -.31* | .22 | -.19 |
| 身体 | .00 | .17 | .07 | .01 |

* : $P < .01$ で $r > .3$

(4) MMPIのPa、Sc、Ma尺度

次にMMPIの3つの下位尺度との関連を検討する。これら3つの尺度は、病理に基づく自己評価の高さの可能性が予測されたが、Table19に示したとおり、どの尺度においてもそれは見いだされていない。共通して対自己領域の評価である自己受容との負の相関を示している。Pa（偏執性）尺度とMa（軽躁）尺度は極めて類似した結果を示し、低い自己受容と高い対人過敏に関連している。偏執、軽躁に自我肥大や多幸状態がみられても、それは自己評価の高まりを伴っているものではないことがわかる。Sc（分裂性）尺度においては低い自己受容、開放性、優越感が示された。対人的領域についてみると、PaとMaは他者の視点の評価に対する認知の低下を伴い、Scは自己の視点からの他者との関係評価の低下を伴っていると整理できる。

Table19 MMPIと自己評価的意識尺度の相関

| | 自己受容 | 開放性 | 対人過敏 | 優越感 |
|---------|-------|-------|------|------|
| MMPI-Pa | -.39* | -.14 | .28 | -.12 |
| MMPI-Sc | -.27 | -.31* | -.04 | -.28 |
| MMPI-Ma | -.28 | .06 | .33* | .09 |

* : $P < .01$ で $r > .3$

(5) 学業適応得点

次に学業適応得点と自己評価との関係を見る。Table20に示したように、 $r = .3$ の基準をみたく相関は得られなかった。しかし、開放性とは負の相関係数（ $P < .05$ ）がみられ、学業において優秀な成績を得た者の自己評価（特に他者に対して開かれた態度を有しているかについての評価）はけっして高くはない。むしろ、学業に関心が向かい友人関係を軽んじているという認知をもっている傾向がうかがえる。

Table20 学業適応と自己評価的意識尺度の相関

| | 自己受容 | 開放性 | 対人過敏 | 優越感 |
|------|------|------|------|-----|
| 学業適応 | -.16 | -.21 | -.03 | .01 |

(6) 同一性混乱尺度

同一性混乱と自己評価との関連については、Table21に示したとおり、意味のある相関は得られなかった。しかし相関係数は小さいものの、一貫して肯定的自己評価とは負の、否定的自己評価とは正の相関係数が示されていること、従来の研究でも同様なことが指摘されている（宮下、1987）ことから、同一性混乱と自己評価は負の方向への関連性をもっていると考えてよいであろう。

Table21 同一性混乱と自己評価的意識尺度の相関

| | 自己受容 | 開放性 | 対人過敏 | 優越感 |
|-------|------|------|------|------|
| 同一性混乱 | -.20 | -.13 | .18 | -.16 |

(7) 進学受容度

最後に、自己評価に影響を及ぼすであろうと思われる進学受容経験との関連を考える。Table22に示したとおり、進学受容度と自己受容の間に意味のある正の相関が得られた。進学した学校への受容度が高い者は自己受容も高いといえる。しかし、今回の調査は進学前後における自己評価の変化を追っているものではないので、望んだ学校への進学が自己評価を高めたのか、それとも本来的に自己評価の高い者の学校にたいする満足度が高いのかを説明することはできない。

Table22 入学受容と自己評価的意識尺度の相関

| | 自己受容 | 開放性 | 対人過敏 | 優越感 |
|------|-------|-----|------|-----|
| 進学受容 | .30 * | .23 | -.07 | .12 |

* : P < .01で r > .3

3 総合的考察

(1) 自己評価的意識の理解

ここでは、自己評価的意識をどうとらえていったらよいかについての考察をすすめていく。今回実施した調査の結果は、発達の観点からも、他の尺度との関連からも、自己評価的意識の下位構造を想定することの意義が示されたといえる。それは、MMPIの3つの下位尺度や、問題行動傾向の5因子間の質的差違が、自己評価の対自己側面（1因子）と対人的側面（3因子）の組み合わせによって理解されること、また、青年期内における発達の変化において、評価的側面で一貫した上昇傾向、受容的側面で一時的停滞がうかがわれることなどによって支持される。

自己評価的意識の下位因子を構成する作業として、筆者が梶田の項目から4因子を見いだしたように、質問紙の結果から因子分析によって抽出するという手段が用いられるが、因子間の独立性など統計的客観性は保証されるにしても、それだけでは不十分で、理論的説明がなされねばならないと思われる。そこで、既に構成された自己評価のさまざまな側面を説明するモデルを構築していきたいと考えている。

自己評価的意識はまず、主体としての自己による、客体としての自己に対する評価的意識として理解される。主体自己と客体自己の関係に限定した対自己側面（平石、1991）の意識について、Fig.1に示した。意識の方向性としては当然主体自己から客体自己（図においては左から右）であり、その意識の流れを、伊藤（1990a）を参考に評価次元と受容次元に分割すると、それぞれ「自己評価」、「自己受容」と命名することができる。「自己評価」には自己信頼や自己価値、自信といった意識が含まれ、「自己受容」には自己承認、自己尊重、充実感などが含まれている。

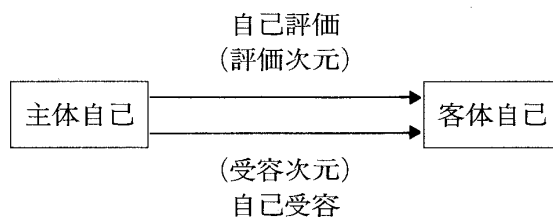


Fig.1 自己評価的意識の対自己側面

次に、対人的側面について検討してみよう。対人的側面であっても評価するものは主体自己である。今回の因子分析で抽出された因子を用いると、対人的側面として開放性、対人過敏があげられる。開放性は、自己による非防衛的な他者へ開かれた態度であって、自己から他者への意識の流れに対する評価である。対人過敏は、他者のまなざしによる自己への評価に過敏になる事態をネガティブにとらえたもので、他者から自己への意識の流れに対する評価であるといえる。この関係をFig.2に示した。開放性と対人過敏は、主体自己による評価対象が、自己から他者への方向性をもつものなのか、他者から自己への方向性をもつものなのかによって区別される。またこの場合の他者として、前者を客体他者、後者を主体他者と分離しなければならない。これら2つの評価を、「自己開放性」、「他者開放性」と命名することにする。後者の命名には、自己評価の肯定的方向での命名に統一するという配慮が含まれている。

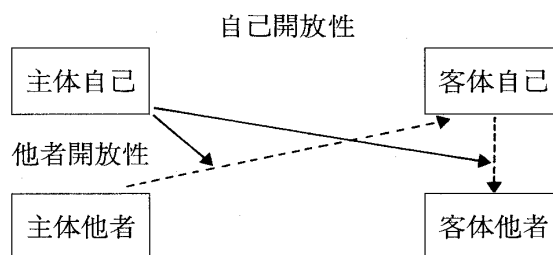


Fig.2 自己評価的意識の対人的側面

次に優越感についてであるが、これは客体自己と客体他者間の比較を通じた評価であると考えられる (Fig.3)。この意識を「優越」と命名しておく。

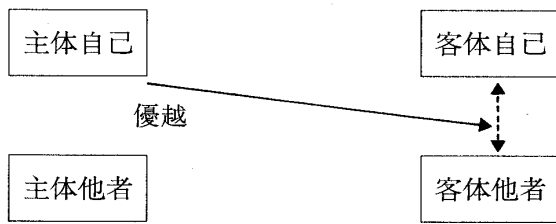


Fig.3 自己評価的意識の自己他者比較側面

以上、自己評価的意識の構造について、自己-他者、主体-客体という2軸を仮説的に設定し、評価-受容次元を補足的に用いて、それら意識の流れの方向性の観点から説明を試みた。ここで、残る意識の流れ (Fig.4) についても言及しておきたい。主体自己から客体他者への意識は他者評価であるといえ、主体自己から主体他者への意識は他者による自身の認知への評価 (推測) であるといえよう。前者には、他者受容の概念が含まれよう。

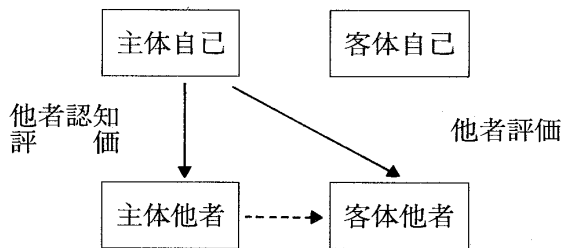


Fig.4 他者評価的意識

(2) 自己評価的意識と心理的健康

前項において、自己評価的意識の構造モデルを仮説的に展開した。ここではそのモデルに準拠して、心理的健康との関係を模索していきたい。

自己評価的意識のモデル構造について再度 Table23に整理した。これまでに確かめられた他の尺度との関連について、この5因子をもとに検討していく。

Table23 自己評価的意識の因子

| 側面 | 因子 | |
|-------|--------|--------|
| 対自己側面 | ①自己評価 | ②自己受容 |
| 対人的側面 | ③自己開放性 | ④他者開放性 |
| 比較的側面 | ⑤優越 | |

①自己評価

これまでの研究においては、自己評価と称されながら多くの下位因子を含んだ広い概念を扱っているものがほとんどであったので、ひとつの因子としての「自己評価」の意味を検討するのは容易ではない。「自己評価」を現実自己に対する評価の高さに反映されるとしてみていくことにする。適応的指標との関連を調べた多くの研究は、概ね適応的な者の自己評価の高さを示してきた。また、パーソナリティとの関連では、積極性、外向性と密接に関ってくる。Rogers (1951) がカウンセリングの効果として、現実自己像の高まりによってもたらされると説明したように、現実自己にたいする自己評価の水準そのものが心理的健康を表現する。しかし、それは一次関数的に高ければよいというものでなく、理想自己像との相対的視点でみるべきである。

非行などの行動化機制がとられる不適応においては「自己評価」との意味のある関連が見いだされないとの報告がいくつかあるが、そのことを考慮すると、「自己評価」因子が指標となりうる適応は主に主観的的症状をとるものであるといえよう。

②自己受容

この因子に関しては、今回筆者が実施した調査の分析に用いられ、従来も検討されたものであるから、直接に検討することが可能である。「自己受容」は、自己評価の高さから独立して、ありのままの自己が認知的に受け入れられるかどうかにかかわってくる。したがって高木ら (1989) が述べたように、肯定的な自己認知に対する自己受容と否定的な自己認知に対する自己受容というとらえ方が可能になってくるが、ここではそのような類型化は試みない。

発達的に「自己受容」は青年期において高まることが示された (Table16) が、これは自己に

対する価値感や有能感が高まり、現実自己像に対する評価が上昇したと解釈するのではなく、「今のそのような自分がかげがえのない自分として尊重される」ようになるのとらえるべきである。学業成績との相関が示されなかった (Table20) ことも、この因子が客観的にどう評価されるレベルにあるかという問題と切り離すべきことを物語っている。しかし、伊藤 (1991a) が示したように、公的自意識の高い者では「自己受容」と理想-現実の乖離の間に負の関連があることも考慮せねばならない。

「自己受容」と問題行動の関連 (Table18) や MMPI との関連 (Table19)、工藤 (1990) の抑鬱との関連で、やはり精神症状との負の相関がみとめられたことは、「自己評価」の因子と共通している。しかし、「自己評価」にはかなりの程度客観性が反映されるが、そこから独立してなお「自己受容」できるという意識に対しては、より積極的に心理的健康とのかかわりを取り上げてよいのではないか。

また、自己の内面に対する受容は、名前や身体などの外的な自己像と錯綜し、全体として総合自己像が形成され受容されるとみられる。

③自己開放性

「自己開放性」は他者に対して素直に自己表現のできることを表わす因子で、対人的適応を規定する要因になり、外向性や活動性をよく反映すると考えられる。「自己受容」との関連が深く、互いに促進的に作用するとも思われる。学業成績との関連 (Table 20) では負の相関が示され、大学における成績優秀者は他者に閉鎖的で、対人的には問題が指摘されるのではないだろうか。また、問題行動の中で「奔放」の因子とむしろ正の相関傾向をもつことは、「奔放」の問題が対人適応の観点からは否定的に解釈されてはならない点を指摘しているといえる。

④他者開放性

「他者開放性」は他者のまなざしにとらわれず自由に振る舞えることを表わし、対人不安、防衛性との対概念である。これが高いと公的自意識が低く、自己適応的となる。MMPIの3尺度においては、偏執性と軽躁性できわめて低く、分裂性では関連をもたないという説明概念とな

りうる。「自己開放性」と「他者開放性」の2つの因子の組み合わせで、対人関係のあり方が容易に理解されるであろう。

⑤優越

「優越」は他者との比較における自己の相対的評価である。今回実施した調査において、さまざまな指標との間に積極的な関連を示さなかった唯一の因子である。それは、この因子が適応的指標と直線的関係を有していないためであるかもしれない。他の研究においてもこれを取り上げたものは少なく、優越感と心理的健康との関連をどう扱うか、今後の研究を必要としている。

文 献

- 相川 充 1991 特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究 心理学研究、62、149-155.
- 安藤 朗子 1989 他者への思いやりと自己評価との関連について 日本心理学会第53回大会発表論文集、42.
- 青木まり・松井豊・岩男寿美子 1986 母性意識から見た母親の特徴 ライフ・ステージ、自己評価、充実感との関係から 心理学研究、57、207-213.
- 遠藤 由美 1990 ポッシブルセルフに関する研究 現実自己、理想自己、可能自己の関係 日本心理学会第54回大会発表論文集、185.
- 遠藤 由美 1991 自己認知と自己評価の関係 ネガティブ側面からの検討 日本心理学会第55回大会発表論文集、669.
- Erikson, E.H. 1959 Identity and the Life Cycle, Psychological Issues No.1, Monograph 1. 小此木啓吾 (訳) 1973 自我同一性 アイデンティティとライフサイクル 誠信書房
- 藤岡 秀樹 1989 ボディー・イメージと自己受容性に関する研究 (1) 高校生の場合 日本教育心理学会第53回総会発表論文集、181.
- 古澤頼雄・藤崎真知代・赤塚純子・柏木恵子 1990 子どもの自己像は両親の自己像・子供像を反映するか 新生児期より思春期に至る縦断的研究 (9) 日本心理学会第54回大会発表論文集、63.
- 葉賀弘・大島吉晴・西野証治 1990 接触態度と自己概念、身体概念との関係についての研究 日本教

- 育心理学会第32回総会発表論文集、237.
- 長谷川博一 1989 青年の問題行動傾向の構造 女子学生についての調査結果 名古屋大学教育学部心理教育相談室紀要、4、127-133.
- 長谷川博一 1991a 青年期における問題行動傾向と自己評価的意識 東海女子大学紀要、10、109-116.
- 長谷川博一 1991b 性格検査結果のフィードバックが自己評価的意識変容に及ぼす効果 日本教育心理学会第33回総会発表論文集、608.
- 林洋一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤真一・長田由紀子・成田健一 1991 横断比較による生涯発達(5) Self-Esteemについて 日本心理学会第55回大会発表論文集、471.
- 平石賢二 1990 青年期における自己意識の構造 自己確立感と自己拡散感からみた心理的健康 教育心理学研究、38、320-329.
- 平石賢二 1991 青年期における自己意識の発達に関する研究 自己肯定性次元と自己安定性次元についての検討 日本教育心理学会第33回総会発表論文集、265-266.
- 井上知子・三川俊樹・芳田茂樹 1991 青年期の性役割形成とその関連要因に関する研究(IV) 日本教育心理学会第33回総会発表論文集、501-502.
- 石井康智・鈴木晶夫・山口創・青木豊 1991 姿勢の研究(IX) 大学生の姿勢の現状とうつ気分・自尊感情・人生観との関連の検討 日本心理学会第55回大会発表論文集、458.
- 伊藤美奈子 1989 青年期自己受容における分化と統合 日本心理学会第53回大会発表論文集、24.
- 伊藤美奈子 1990a 青年期における自己受容類型化の試み 日本心理学会第54回大会発表論文集、144.
- 伊藤美奈子 1990b 青年期自己受容における発達の变化 日本教育心理学会第32回総会発表論文集、116.
- 伊藤美奈子 1991a 理想とのずれ・自意識と自己受容との関連について 日本教育心理学会第33回総会発表論文集、287-288.
- 伊藤美奈子 1991b 自己受容と性格特性の関連について 日本心理学会第55回大会発表論文集、614.
- 岩淵千明・田中国夫・中里浩明 1982 セルフ・モニタリング尺度に関する研究 心理学研究、53、54-57.
- 梶田 叡一 1988 自己意識の心理学 第2版 東京大学出版会
- 加藤隆勝 1960 自己意識の分析による適応の研究 心理学研究、31、53-63.
- 加藤 邦子 1990 self-esteemに関する研究 挫折感との関連 日本教育心理学会第32回総会発表論文集、214.
- 川岸 弘枝 1972 自己受容と他者受容に関する研究 受容測度の検討を中心として 教育心理学研究、20、34-41.
- 河合美子・富田正利 1990 身体意識に関する研究 身体意識尺度と自己意識尺度の関連について 日本心理学会第54回大会発表論文集、102.
- 甲村和三・小笠原昭彦 1989 各種小児患者の自己意識と療育に関する研究 その(3) 自己評定による不登校児の自己意識の分析 日本心理学会第53回大会発表論文集、327.
- 工藤恵理子 1990 現実自己、理想自己、あるべき自己、なり得る自己とその達成観と抑鬱との関係について 日本心理学会第54回大会発表論文集、186.
- 宮本真理 1991 学業に関する能力認知とSELF-ESTEEMとの関係(2) 日本心理学会第55回大会発表論文集、896.
- 宮野 祥雄 1981 非行少年の自己概念 Qテクニックによる分析 教育心理学研究、29、10-18.
- 宮下 一博 1987 Rummessenの自我同一性尺度の日本語版の検討 教育心理学研究、35、253-258.
- 宮沢 秀次 1980 青年期における自己受容性測定スケールの検討 日本教育心理学会第22回総会発表論文集、516-517.
- 宮沢 秀次 1988 女子中学生の自己受容性に関する縦断的研究 教育心理学研究、36、258-263.
- 宮沢 秀次 1990 自己の「名前」についての意識と自己受容性の関係 日本教育心理学会 第33回総会発表論文集、251.
- 諸井 克英 1985 高校生における孤独感と自己意識 心理学研究、56、237-240.
- 森下 正康 1990 親の養育態度と子どもの自己受容の発達 日本教育心理学会第32回総会発表論文集、157.
- 無藤 清子 1979 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性 教育心理学研究、7、28-37.
- 根本 橋夫 1972 対人認知に及ぼす Self-Esteemの影響(I) 実験社会心理学研究、12、68-77.
- 新名理恵・矢富直美・坂田成輝・千葉征慶 1991 ワーク・ストレスと自己認知(2) Self-esteemの緩衝効果 日本心理学会第55回大会発表論文集、427.
- 小笠原昭彦・甲村和三 1989 各種小児疾患者の自己

- 意識と療育に関する研究 その(3) 自己評定による喘息児の自己意識の分析 日本心理学会第53回大会発表論文集、326.
- 岡田 努 1987 青年期男子の自我理想とそのその形成過程 教育心理学研究、35、116-121.
- 岡田努・永井徹 1990 青年期の自己評価と対人恐怖的心性との関連 心理学研究、60、386-389.
- 尾見 康博 1991 「お人好し」と「親しんでいる集団内での役割」「人間観」「自己評価」との関連 ひとつの性格表現用語のもつ意味を考える 日本心理学会第55回大会発表論文集、613.
- Rogers, R.C. 1951 A Theory of Personality and Behavior. 伊藤 (編訳) ロジャース全集 8 パーソナリティ理論 岩崎学術出版社
- Rosenberg, M. 1965 Society and the adolescent self-image. Princeton University Press.
- 斎藤久美子 1959 自己意識の分析による人格適応性の一研究 心理学研究、30、277-285.
- 椎野 信治 1966 適応の指標としての自己概念の研究 教育心理学研究、14、37-44.
- 柴田利男・野辺地正之 1990 青年期における身体満足度と自尊感情の関連性 日本心理学会第54回大会発表論文集、68.
- 園田雅代・中釜洋子 1990 青年期後期から成人期にかけての女性の自我同一性発達に関する縦断的研究VI 不安・自己評価・親密性尺度における同一性群間比較 日本心理学会第54回大会発表論文集、154.
- 菅原 健介 1984 自己意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み 心理学研究、55、184-188.
- 砂田 良一 1979 自己像との関係からみた自我同一性 教育心理学研究、27、65-70.
- 高木秀明・徳永由紀 1989 自己受容に関する一研究 測定尺度作成の試み、及び自尊感情等との関連について 日本教育心理学会第31回総会発表論文集、227.
- 徳田 完二 1987 青年期における自己評価と両親の養育態度 心理学研究、58、8-13.
- 遠山 尚孝 1989 摂食障害における〈自己-身体〉の回復過程について 心理臨床学研究、7、18-30.
- 辻井 正次 1991 自我同一性とコンピテンス及び抑うつ状態の関連についての研究 児童期から青年期への発達課題の移行の視点から 日本心理学会第55回大会発表論文集、548.
- 山本 里花 1989 「自己」の二面性に関する研究 青年期から成人期にかけての発達傾向と性差の検討 教育心理学研究、37、302-311.